

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 16 日現在

機関番号：27401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26580084

研究課題名(和文) 東北の近世版本にみられる方言反映事例の発掘と評価

研究課題名(英文) Discovery and Study of Tohoku Dialects seen in the Books Published in the Early Modern Tohoku Regions

研究代表者

米谷 隆史 (YONEYA, Takashi)

熊本県立大学・文学部・教授

研究者番号：60273554

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：近世の東北地方で刊行された書物のうち、30本以上に方言の反映が存することを明らかにした。その大部分は庶民向けの農書や教訓書で、中には、読みやすさを考慮して方言を反映させた旨を序文で明言するものも見られる。ただし、秋田藩の家老が武士の心得を記した書物にも語頭以外のカ・タ行への濁点が見られることから、教諭の場においては、こうした表記による著作が階層を越えて許容されていたと推定される。

研究成果の概要(英文)：This research revealed that the 31 books, which published in the early-modern Tohoku regions, had the parts using the dialectal phonemes and vocabularies. Most of them are the introductory books of agriculture or of morality for common people. In some of those books the preface says that they used the dialect in some parts so that the local people could read easily. On the other hand, in the book of precepts of the samurai class by the karo, chief retainer, of Akita-han, the /k/ and /t/ consonants sometimes have the dots indicating voicing added to them except with in word-initial position. Considering this, it is assumed that every class sometimes uses the dialect in elementary education.

研究分野：日本語学

キーワード：東北方言 出版 印施 濁点 五十嵐富安 農諭

1. 研究開始当初の背景

2011年の震災後、東北の旧家に伝存していたと見られる大量の文献が市場に流出した。それらの中には、語頭以外のカ・タ行音に対応する仮名に濁点を付し、かつ、折々に不濁を示す圈点をも交える、三浦命助の『獄中記』を思わせるような興味深い写本(但し明治期のもの)も存し、文書・典籍の現地保存・現地活用の重要さと困難さとが改めて痛感された。さらに、東北で刊行された近世版本に方言が反映している例がいくつか存することに気づいた。開始当初に見出していたのは次の6本(出版地の確証がないものも含む。具体例の()内は傍訓。具体例の斜線の前は音声・音韻上の、後は語彙上の反映である。前者については該当箇所を下線を施した。

『農業童子訓』 勸農堂(秋田)編「乙酉(文政 8(1825)年)力誌」。具体例：無頼(ふら[△])貯[△] 苗(ない) / 漑(まかす) 培壅(さくり)等

『奥羽勸農新編』 勸農堂(秋田)編 天保 2(1831)年刊。具体例：交(ま[△]ぞ)へて 藁灰(わらば[△]) 楮(こふず) 池(いげ) 厠(せづ[△]ゑん)等

『農稼心得弁』 天保 10(1839)年 国分町(仙台)柳川庄兵衛刊。具体例：雌苗(め[△]ない) 雄苗(お[△]ない) 拵(こしら[△]ひ) 費(つい[△]ひ)等

『農諭』 嘉永 3年(1850)会津大沼郡(三島町)五十嵐富安再版。具体例：俄(にはが) 諸色(しよしぎ) 至(いだり) 忽(たぢまぢ)等

『農家手習状』無刊記だが、刊記の存する別版はいずれも仙台版。具体例：手習(て[△]なら[△]) 相守(あ[△]まもり) 甥(お[△]) 早苗(さ[△]ない)等

『小野篁歌字尽』無刊記。『国語文字史の研究』13 影印。具体例：忿(いがる) 海鼠(なま[△]こ) 鞭(むち) 男(おどこ)等

上記の書物が、往来物・教訓書、中でも農書に偏することは注目されたが、母数が少なく、書物の分野についてこれ以上の分析を進めるだけの材料がなかった。また、古文書等の筆写本を資料とする東北方言の音声・音韻の史的研究は、東北各地の近現代の音声状況に関するデータの蓄積と連動しつつ、分析の精度を増して現在に至っているのに対し、東北の近世版本に見える方言の反映状況を検討した研究はごくわずかであった。研究課題に「発掘と評価」と記した所以である。

2. 研究の目的

上述の状況を踏まえ、本研究では、近世の東北における刊行書物を可能な限り網羅的に調査し、

- 1) 方言の反映が存する書物の種類と分野
- 2) 各書に反映している方言状況の類型化
- 3) 方言が反映した背景

以上の3点を明らかにすることで、近世の東北地域で許容された、非標準的な仮名遣や語

彙使用のありようとその存在意義とを解明することを目的とした。

3. 研究の方法

上記1)を明らかにするため、下記の図書館・資料館等において、近世東北で刊行された版本を可能な限り閲覧・撮影した。なお、原本の撮影が叶わない場合は複写物の撮影を以て代えている。また、予算の範囲内で購入した版本も存する。

【調査先】福島県歴史資料館・福島県立図書館・福島県立博物館・会津図書館・三島町交流センター山びこ・福島県某家/宮城県図書館・仙台市民図書館・宮城教育大学附属図書館/鶴岡市歴史資料館・酒田市光丘文庫/岩手県立図書館・もりおか歴史文化館・洋野町種市歴史民俗資料館/秋田県立図書館・秋田県公文書館・大館市立栗盛記念図書館真崎文庫/弘前市立図書館

次いで、上記2)を明らかにするため、方言の反映が特に顕著な版本について、その反映の具体例の分類を進めた。

さらに、上記3)の検討のため、刊行地周辺の文献や文書類を調査し、編著者や出版の経緯等の解明に努めた。

4. 研究成果

1) 方言の反映が存する書物の種類と分野

研究開始当初、方言の反映が確認されている東北の近世版本は先の ~ の6本及び、今回は調査対象に含めなかった絵暦や絵経の類だけであったが、研究遂行中に山本淳によって享和 2(1802)年刊の『かてもの』の事例が報告された。この7本に、方言反映例が本文冒頭近くより出現するものに限っても、さらに 24 本を追加することができた。以下に一覧を示す。掲出は分野ごととし、分野内の順序は刊年の早いものから配することを原則とするが、相互に関連する書物群はまとめてある。

【農業】 を加えて全 11 本

- 『弘化四年 雲気考』弘化 3(1846)年 刊
- 『弘化五年 雲気考』弘化 4(1847)年 刊
- 『嘉永二年 雲気考』嘉永元(1848)年 刊
- 『五穀人豊紀 嘉永四年 運氣考』嘉永 3(1850)年(仙台)臥龍堂文兵衛刊
- 『五穀人豊紀 嘉永五年 運氣考』嘉永 4(1851)年(福島)臥龍堂丈助刊
- 『蚕天計秘訣』文久 4(1864)年(伊達郡梁川)中村善右衛門刊

【教訓】全 10 本

- 『孝行和讃』文政 9(1826)年(鶴岡)専念教寺刊
- 『芹羹余言』文政 13(1830)年(秋田)疋田松塘刊力
- 『孝の道』嘉永 6(1853)年(酒田)松山心学社中刊
- 『子孫繁昌手引草』嘉永 3(1850)年(会津若

- 松)菊地喜右衛門刊
『万民心の鑑』嘉永7(1854)年(会津若松)蘇堂刊
『子孫繁昌手引草』嘉永年間力(三島町)五十嵐富安刊
『白円禅師種蒔草』嘉永年間力(三島町)五十嵐富安刊
②①『古聖歌拔書』嘉永年間力(三島町)五十嵐富安刊
②②『善悪種蒔鑑和讃』安政5(1858)年(三島町)五十嵐富安刊
②③『二世安楽教訓書和讃』安政5(1858)年(三島町)五十嵐富安刊

【字尽・往来】 を加えて全5本

- ②④『イロ八字引』(仮題)文政13(1830)年(仙台)伊勢屋半工門他刊
②⑤『農家手習状』(仙台)西村治右衛門刊
②⑥『農家手習状』刊年・刊行地とも不明。とは別版

【宗教】全3本

- ②⑦『鶴城/霊場 三十三寺御詠歌』万延元(1860)年(鶴岡)梨子屋禅入他刊
②⑧『鶴岡 善光寺御詠歌』江戸後期(鶴岡)長泉寺刊
②⑨『因果和讃』刊年・刊行地とも不明

【医学：含、災異】全2本

- ③⑩『救荒略』天保4(1833)年(仙台)医学校刊
③⑪『産家教草』嘉永3(1850)年 剛齋刊

農業と教訓関係の書物で全体の3分の2を越える。また、字尽・往来に含めたうちの3本は農民向の往来物である⑤②⑤②⑥『農家手習状』であり、医学に含めた③⑩『救荒略』③⑪『産家教草』の2本も、専門書ではなく、飢饉時における食物の確保や食事法を説いたり、産前産後の日常生活上の注意などを記す、ごく通俗的な内容であることを勘案すれば、9割ほどが広い意味での農書・教訓書の枠内に入ることになる。

当初判明の5倍ほどに増加したとは言え、全体の総数が30程度であること、また、篤農家五十嵐富安による農書・教訓書④⑩⑪～②③の6本と『雲気考』『五穀人豊紀』(後述)の5本とで3分の1を占めていること、山形県の山形市、福島県の郡山市及びいわき市周辺の調査が不十分であること等、最終的な判断を保留すべき要素は残っている。しかし、方言の反映が顕著な版本は書肆による商品よりも印施本に目立つことを考えると、今後新たな版本が発見されたとしても、農書・教訓書といった印施本に親和性の高い分野が多数を占めるといった傾向に変化は生じない可能性が高い。

なお、『雲気考』と『五穀人豊紀』はほぼ同形態の書物である。農事の吉凶を記す部分が多いので仮に農書に含めたが生活全般に

わたる暦書としての性格も強い。上に掲出した5本は、刊行者不明のものを含め、東北地方での刊行の可能性が高いと判断したものである。なお、の翌年分である嘉永6年の『五穀人豊紀』は江戸の浅草新寺町 玉光堂善助の刊行となっており、この版には方言の反映は見られない。同書は全て「土御門殿御門人」を標榜する「嶋津大定」の編である。仙台・福島・江戸と拠点を移しつつ暦書を編集し続けたこの人物の伝は不明である。

また、東北での刊行本ではないため上記には含めていないが、俳書『其蓮』宝永4(1707)年 江戸栃木屋清兵衛刊所収の百韻で、発句「釈迦に哭かぬ猫百番のなみた哉」に対して脇句「袂をしほるづくべばつかい」「づくべ」と「ばつかい」の右傍に小字でそれぞれ「土筆」、「落塔」と方言語彙の使用が見え、両語の初出として注目される。また、『御成敗式目絵鈔』文政5(1822)年 仙台伊勢屋半右衛門刊は、本文中に方言の反映は見られないにもかかわらず、末尾の著者名「小槻宿祢伊治」の付訓に「をつぎすぐねこれはる」と語頭以外のカ行音の濁音化の反映と見られる例が存する。これは筆耕の誤写に由来する誤刻と判断すべきかもしれないが、この部分のすぐ左には「謬文字改正令版行」の記述があることを勘案すると、単なる不注意で見落とされたものか、何らかの意図のもとに反映が残されたのか疑問が残る。

- 2) 各書に反映している方言状況の類型化
各書物に見られる方言の反映は、
a 方言語彙の使用
b 語頭以外のカ・タ行音への濁点添加
c 連母音の音訛

の大きく三つに分類される。この地域の筆写本で多く見られる母音イ - エの交替が表記に反映した例は、連母音の環境以外ではごく少ない(それゆえ、語頭の仮名は通常の表記規範からはずれることがない)。ちなみに、語頭のワ音をハの仮名で表記する例が散見されるが、これは筆写本においては全国的に見られる仮名使用であることから、八行唇音の残存といった方言の反映によるものとは見做していない。

なお、これらの反映例の出現には書物によって偏りがある。例えば、③⑩『救荒略』には a「夏枯草(靱草)」の付訓「うばちこ」、b「石榴」の付訓「ざぐる」、c「加ひて」のいずれも見えるが、こうした書物はむしろ少ない。また、同じ五十嵐富安の刊行になる『農諭』と『子孫繁昌手引草』においては、前者はbがほとんどでcはごく少ないのに対し、後者はcがほとんどでbはほぼ見られないという対照を見せる。

aが少ないのは、地方刊行物の常で、先行する書物に大きな改編を加えずに出版しているものが多いことに起因するが、bとcとの出現の多寡に見られる傾向性の要因はなお不明である。編著者や刊行者及び読者とし

て想定された人々、それぞれの階層を踏まえ
た検討を続けねばならない。

3) 方言が反映した背景

これらの31点の書物は、刊行者こそ武士、
農民、町人、宗教者と様々であるが、その内
容から、大部分が所謂庶民層を対象に刊行さ
れたことは明らかである。明確な意図を持た
ずに方言の反映を許容している事例も多い
と推測されるが、⑦『鶴城/霊場 三十三寺
御詠歌』の序に「此書は音韻新古(おんいん
しんこ)の仮名(かな)にかゝらず、惟
(たゞ)吾等(われら)とおなしき愚夫愚婦(く
ふくふ)のよめやすぎを所詮(もつはら)と
す」とあるように、詠歌を唱える庶民(この
場合は鶴岡城下の町人の婦人)に合わせた表
音的な仮名使用を行った旨を表明するもの
も存する。

一方、『芹羹余言』のように久保田(秋
田)藩の家老格の武士が主君に対して大名と
しての心得を説くという内容の書物(ただし、
刊行物ゆえ読者として想定されているのは
主君その人ではあるまい)にも「能々わぎま
へその上に、それぞれ得たる所江」のような
濁点が見える。これは、作者でもある疋田松
塘が戯作や漢詩集の著作もある文化人であ
ったことに起因すると推定される。夙に指摘
がある崎門派の国字解筆写本に見える方言
の反映が思い起こされるところであるが、近
世後期の東北地方においては、教諭に際して、
各階層とも方言を反映させた書物を許容し、
時にその効果を意図的に活用していたこと
が明らかになったといえよう。

4) その他

研究構想段階で設定した目的に関わる成
果は上述の通りであるが、近世後期熊本の方
言辞書『菊池俗言考』の編纂動機を検討する
にあたって、ここでの検討が活かされること
となった。さらに、発展的な成果に次の3点
がある。

ア) 五十嵐富安による『農諭』刊行の経緯
福島県歴史資料館所蔵の文書等により、富
安による『農諭』の刊行には、会津藩が制度
として確立させていた社倉制度に基づく小
児養育御備金が貸与されていたこと、版下作
成から製本までを会津藩の版元菊地庄左衛
門が請け負っていたこと等が明らかになった。
方言の反映を含め、同書は、近世後期の
会津地域における政治・文化・言語の有り様
を体現する一本であるといえよう。

イ) 東北方言を記載する近世文献の発掘

近世の東北方言資料として知られている
諸文献以外に、新たに次の文献が目される
ことが明らかになった。

・『所童早合点』文政5(1822)年頃成立

盛岡市南部の旧都南町に住した星川里夕
の編。早く岩手の郷土史家 太田孝太郎によ
って盛岡藩政時代の往来物の一本として紹

介されており、分類体の辞書の形態を採るこ
となどが指摘されている。中に「蝶(てう)
世にかつかべといふ。花巻にてかひらことい
ふ」のように方言に言及する部分が40箇所
以上見られ、在地の知識層が意識し得た方言
の一端を知ることができる。

ウ) 方言の反映が見られる版本の地域的広がり

印施による農書や教訓書、通俗医書等の刊
行は東北地方に限らず、各地で行われている。
これらに対する調査は今後の課題とせざる
を得ないが、九州地方の通俗産育書の1本に
方言反映の事例を見いだした。「博多 横地見
碩 述」の弘化3(1846)年刊『安産手引草』
である。同書は中野三敏により九州地方出版
書の一例として取り上げられることがあつ
たが、九州方言の反映について言及されるこ
とはなかった。浅葱の意の「せんぶぎ」、刀
豆の意の「たちはき」、甘藷の意の「あかい
も」等、食品名に関わるものが中心であるが、
「(髪)をつぐり…」の動詞「つくる」が巻
き固める意であれば九州方言であるし、「便
器」への付訓「おかを」も近世の文献上には
見いだしがたい九州方言語彙の一つである。

1本のみではあるが、近世に方言を交えた
刊行物による教諭が、出版界におけるいわゆ
る三都に隔たる東西で試みられていたこと
を証する事例である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文](計 1件)

米谷隆史

「『菊池俗言考』の成立をめぐって」(『熊本
県立大学大学院文学研究科論集』9巻)査読
有 2016年 pp1-18

[学会発表](計 2件)

米谷隆史

「五十嵐富安版『農諭』の刊行をめぐって」
熊本県立大学日本語日本文学会 2017年

米谷隆史

「東北の近世版本に見られる方言反映の諸
相をめぐって」第337回日本近代語研究会
2016年

[図書](該当無)

[産業財産権]

出願状況(該当無)

取得状況(該当無)

[その他]

ホームページ等 該当無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

米谷 隆史 (YONEYA Takashi)

熊本県立大学・文学部・教授

研究者番号：60273554

- (2)研究分担者 該当無
- (3)連携研究者 該当無
- (4)研究協力者 該当無